

## 城西病院

薬剤師 木村 健

私たちは各地の避難所をまわって活動をしました。同じ避難所といえども場所によっては電気がまだきていなかったり、看護師が常駐している所もあればないところもあり、場所によっても様々でした。特に沿岸部の避難所は一ヶ月たっても厳しい状況だと感じました。最終日に行った牡鹿半島の方はもともと道が1本か2本しかないのですが、震災の影響で道路が崩れていてところもあり、自衛隊の方のおかげでなんとか通れるようになっていました。様々な業種の方が現地で活動していました。

避難所の方々は精神的にかなり疲れている様子で、もし可能であれば一度地元を離れ、復興するまで安心できる場所で過ごす必要もあるかと思えます。

自分は秋田出身で現地の方とは訛って話していたので、それだけでも少し安心してもらえたかな、と思います。

## 豊科病院

精神保健福祉士 荒川 豊

ある避難所の保健師さんに“休めていますか？”と伺うと、自宅と車が津波で流されながらも、被災日以降家族にも会わず1ヶ月間24時間体制で避難所に常駐されていることや、これまでの経過、職員としての苦悩などを溢れるように話され“もう精神的に限界”と。我々の報告書(行政へ)によるものか定かではありませんが、その後、週休1日の勤務になったそうです。また、各避難所の職員の方々は、自らが被災者であっても職員が故に受診を申し出る雰囲気がない様子で、我々のような外部の者から声掛けすることによって受診される方もいらっしゃいました。職員の方々への支援は多少は出来たのではないかと思います。

しかし、震災後1ヶ月では現場はまだ緊張状態であり、避難所において心のケアを必要とされる方は表面的には把握が難しく、ご本人も気付いていない場合もあり、今回求められた業務は難しかったように思います。これから心理的なゆとりが生まれ、今後の生活を現実的に直視された時、本格的な支援が必要になると感じました。

## ◇日本医療機能評価機構 認定証授与◇



平成23年3月4日、城西病院は財団法人日本医療機能評価機構より認定証を授与されました。平成17年11月にバージョン4.0にて認定を受けてから5年、今回はバージョン6.0にての認定更新（平成22年11月21日～平成27年11月20日）となりました。

機能評価とは第三者が中立的な立場で医療機関の機能を学術的観点から評価を行うもので、病院の機能区分毎に書面審査とサーベイヤーによる厳しい訪問審査を経て、診療・看護など病院が必要な機能を有していることを証明するものです。

# いつも優しく

社会医療法人 城西医療財団  
広報文化委員会 編集

この度の「東北地方太平洋沖地震」におきまして、被害に遭われた皆様に心よりお見舞い申し上げますとともに、犠牲になられた方々のご遺族の皆様に対し、深くお悔やみを申し上げます。

当財団では、3月11日の地震発生をうけて、3月18日に「長野県医師会医療救護チーム」1班3名、4月7日には「心のケアチーム」1班6名を被災地へJMAT（日本医師会チーム）として派遣し、支援活動をおこないました。

## 社会医療法人城西医療財団

理事長・総長 関 健

平成23年3月11日午後2時46分、三陸海岸から北関東の太平洋岸を未曾有の大震災が襲った。東北地方太平洋沖地震と名付けられ、また、東日本大震災と呼称されることとなった。マグニチュード9震度7という大地震と、千年に一度という大津波に加えて、東京電力福島第一原子力発電所のレベル7という炉心融解による放射能汚染が起こった。農産物や魚介類のみならず工業製品にまで放射能汚染というレッテルが張られ、全く安全な産地のものにも風評被害が及び、それがために日本列島全体を暗い影が被っている。

長野県北部栄村を震度6強という余震が襲い、安曇野赤十字病院のDMATが早速出動し、その後も飯水医師会が医療救護にあたっている。長野県医師会は、3月13日に対策本部を立ち上げ、東北並びに栄村に対する医療救護活動に協力する体制を整えた。宮城県のを要請を受け、長野県は医療救護班を石巻に継続して送ることとなり、その第一陣として長野県医師会チームも加わり、佐久の工藤猛先生（長野県医師会常務理事）を隊長とし、城西医療財団から看護師2名事務員1名を隊員として送り出した。県医師会の事務局から1名が加わり、計5名のチーム編成で3月18日より21日まで石巻で救護活動をした。活躍ぶりはそれぞれの言葉で記してある。

4月に入ると厚生労働省から各都道府県に対して「心のケアチーム」派遣要請があり、長野県は宮城県石巻に継続的に派遣することとなった。その第一陣として城西医療財団チーム（SMFT）を編成し、4月7日から10日まで活動した。医師1名、看護師1名、薬剤師1名、精神保健福祉士1名、臨床心理士1名、救急救命士1名の計6名編成であった。現地での足の確保のため車が必要ということとなり、豊科病院のハイエース（4WD/8人乗り）を使用することとした。これが大いに役立ち、また、石巻のこだまホスピタルへのささやかな支援物資（野菜・果物・味噌）を届けるのにも好都合であった。

いつも優しく

社会医療法人 城西医療財団  
〒390-8648  
長野県松本市城西1-5-16  
TEL 0263-33-6400  
FAX 0263-33-9920

ホームページ  
<http://www.shironishi.or.jp>

### 【目次】：

- 「長野県医師会医療救護チーム」「心のケアチーム」被災地へ派遣 P1~4
- 日本医療機能評価機構 認定証授与 P4

### 《城西医療財団 理念》

私達は、病める人、障害を持つ人にいつも優しく、最良の医療サービス及び福祉サービスを一体的に提供する。また、心身の健康保持・増進を志向する人に最良の保健サービスを提供する。利用者を身体的、精神的、社会的、そして倫理的に診療し、科学的根拠に基づいた治療を行う。



## 『長野県医師会医療救護チーム』 H23.3.18から3名派遣

### 城西病院

看護師 内田 勝信

3月18日から3月21日まで、城西医療財団から私を含め3人のスタッフが被災地へ援助のために行きました。現地に行く前からテレビなどでたくさんの映像を見ていましたが、実際の光景は声も出なくなるような状況でした。また、震災から1週間もたっているにも関わらず、情報が錯綜しており、現地のスタッフですら混乱していることもありました。そのような状況の中で私たちは、瓦礫などによって車が入れない山岳部の避難所、民家などを歩いて診療をしてきました。私が特に胸を打たれたことは、そこで過ごす方々が現実を受け止め、直向に頑張っていたことです。私たちが援助したことなど本当に小さなことだったかもしれませんが、しかし、今回の援助によって、現地の方々の手助けが少しでもできていたのであれば光栄だと感じています。

### ミサトピア小倉病院

看護師 高山 順一

地震発生から1週間程での参加で多少の緊張がありましたが、必要とされるなら参加したいと考え決断しました。現地の水、電気、ガスなどのライフラインは全滅していました。石巻赤十字病院から海岸近くの地域に移動すると道路の陥没、津波が残したヘドロや冠水の跡が見られました。倒壊した家屋や瓦礫の山、重なり合った車や無数の船舶を見て声が出ませんでした。道路の脇には毛布やビニールシートに包まれた遺体が数体見られ、災害のもたらした悲惨さを実感しました。各避難所は、衛生上にも良い状態でなく感染性の疾患が蔓延しないか心配でした。多くの方が災害で身体面、精神面に影響が出ていました。感冒、高血圧、便秘、腰痛、余震や津波への恐怖などの影響により不眠、不安などの症状でした。活動は短い期間でしたが、遠くの地から支援に来ていることにとっても感謝してもらえました。それだけでも自分たちの活動は励みになっていると感じました。1日でも早い被災地の復興を願っています。

### 豊科病院

事務員 手塚 尚徳

3月11日、東日本大震災の発生からおおよそ、1週間が経過した18日に被災地石巻市に新潟県を經由して赴きました。新潟県内は普段通りの風景が広がっていましたが、会津盆地辺りから高速道路が大きくゆがみ車が飛び跳ねました。仙台市市内では民家の屋根が崩れ落ち、ビルは外壁が落ちガラスにはひびが入り危険な状態のところもありました。市内はほぼ全ての店が閉店していて、ガソリンや食料品を求める市民で混乱しており、酷い状況だと思っていたのですが、石巻市に入ると港から6キロ離れた日赤病院付近でも、近くの川から海水が押し寄せ、周りの田んぼが池のような状態になっていました。旧最上川を境に船が街中にあたり、家が押し流されたり、ありとあらゆるものが散乱して、瓦礫の世界と化して言葉が失いました。避難している方々は家族や財産を失い、こちらから掛ける言葉が見つからない状況でした。避難所での診察に同行して、避難されている方から「ありがとう」との言葉が、何事にも言いがたい切ない気持ちになりました。



## 『心のケアチーム』 H23.4.7から6名派遣



### 城西病院

救急救命士 津端 隆志

私は城西医療財団の心のケアチームとして宮城県に行きました。津波の影響を受けた地域はあまりに悲惨で言葉が失いました。道は陥没し、車は横倒し状態。さらに停電の影響で信号機が点いておらず車同士の追突事故も多発していました。日常生活ではあり得ない光景に私たちは今回の震災の真の怖さを実感しました。

私は多くの避難所を回り、被災者の悩みなどを聞きました。PTSD（心的外傷性ストレス症候群）が出始める頃だということは事前に聞いてはいたけれども、実際は我慢強く、互いに励まし合う方がほとんどでした。人の、真の生命力を感じました。同時に、私は痛感しました。救急救命士である私は、人の命を守ることが私の最大の使命だが、人の笑顔も守れなければならないと…。

### ミサトピア小倉病院

臨床心理士 中山 聖悟

臨床心理士としてこころのケアチームの一員として参加させていただきました。一個人としての感想は「文字通り壊滅状態で、まるでパニック映画の中のような感じ」の一言です。臨床心理士としては「震度6強の余震の翌日で、復興しかけていたライフラインが再び断絶し、一様に新しい心理的ショックを受けた直後のため、その中から介入が必要かどうかをアセスメントするのは非常に困難でした。また各種メディアで心のケアについて叫ばれていましたが、現地にはほとんど届いておらず、ケアチームの受け入れ態勢も整ってはおらず、アセスメントしても伝える先がないという状態でした。

このような状況であったため、十分に機能し活動できたか心残りがありますが、被災者や支援者と話をさせていただき、貴重な経験を得ることが出来たとともに、今後こころのケアチームが入るための体制作りには貢献できたのではないかと考えております。

### 豊科病院

看護師 内山 慶一

この度、城西医療財団として2回目の震災救援派遣「心のケアチーム」に参加させてもらうことになりました。理事長・総長はじめ、6名からなる今回のチームの中で、看護師として唯一の参加となりました。個人的にも、災害対策の現場に入るのは初めての経験であり、「被災者の方々の役に立てる」といった意気込みと同時に、「精神科の看護師としていったい何が出来るのか？」との不安もありました。

現地では、個人宅も含め、10箇所の避難所を巡回し、いろいろな症状に悩んでいる方の診療の補助や、血圧測定、今までの体験などの話を伺うことが主な内容でした。1ヶ月近く経過していることもあってか、目立った不調の訴えは少なかったものの、慣れや我慢の生活の影で本当の症状に気付かずにいる方も多いのではないかと心配も浮かんできました。

限られた時間の中での活動には限界がありましたが、その中でさまざまな課題を学ぶことができました。この貴重な経験を今後活かしていきたいと思っております。